

## 発 表 要 旨

**題目：**認知ロボット制作現場での哲学とロボット工学の出会い——共同注意の発達過程をテーマに

**氏名：**柴田 正良<sup>1</sup>, 金野 武司<sup>2</sup>

**所属：** 1. 金沢大学人文学類, 人間社会環境研究科  
2. 北陸先端科学技術大学院大学 (JAIST), 知識科学研究科

我々は科研費研究「認知ロボティクスの哲学」(代表者：柴田正良)の一つにおいて、意図的主体性に関わる心的過程を単純なタイプのロボットにおいて実現するという試みを通して、グライスやトマセロらが主張してきた意図形成と意図理解の多重構造の解明を試みようとした。具体的に我々が実現したのは、きわめてシンプルなタイプの行動を行うロボットであるが、重要なことは、哲学とロボット工学の共同研究の一つの可能性(と反省点)をそれが示唆しているという点である。

人の社会的なコミュニケーションは、他者の心的状態を理解し、他者と心的状態を共有することで成り立つ。しかし、ここには周知のように他者理解に関する懐疑論が存在する。では、ロボットのような人工物が人とやりとりする場合はどうだろうか。我々が心的状態と呼ぶものの特徴や性質を備えた仕掛けをロボットに組み込んだとき、人とロボットは心的状態をやりとりすることになるだろうか。今回、我々が取り上げたのは、乳幼児における共同注意に関する心的状態の内的メカニズムである。

共同注意の初期行動は、他者が視線を向ける方向に自らも視線を向けるという単純な行動である。この行動の獲得は生後6ヶ月程度から始まり、24ヶ月程度までの間に社会的行動へと発展すると言われている。この過程で重要なのは、この行動が単純な反射行動として始まりながらも、やがては他者の視線の意図を理解し、自らの意図を視線によって他者に伝えられるようになるという点にある。本シンポジウムでは、まず金野が、反射的な共同注意と意図的な共同注意の基本的な内的メカニズムの相違と、それが人とロボットとのインタラクションに与える影響について報告する。次いで柴田が、この段階以降の意図の重層的な形成と共有に関する概念的アウトラインを提示する。最後に、我々の共同研究の進め方そのものから、哲学とロボット工学の融合的研究に関して若干の教訓を得たいと思う。